斎藤 秀俊

新田次郎

『富士山頂』
新田次郎著／文春文庫
『芙蓉の人』
新田次郎著／文春文庫

早い人では中学生で読破しているかもしれない。ここに紹介する新田次郎の作品群は理系少年の心をくすぐるに十分な内容を有している。新田次郎は無線電信講習所本科すなわち現在の電気通信大学を卒業している理系の人だ。現在の気象庁にあたる中央気象台に入庁し、すぐに富士山測候所に配属となった。

私は小学校時代にラジオの気象通報を聞きながら天気図を作ることに目覚め、中学に入学しても毎日夜10時からのNHK第２放送を聴きながら天気図を描くくらい、気象が好きだった。中学校の百葉箱を毎日整備し、気象観測データをまとめて、中学校気象台を自負して、放送室から地域の天気予報まで流していた。それほどの理系少年に理科の先生が薦めてくれたのが、新田次郎著の『富士山頂』と、『芙蓉の人』だった。両方とも、富士山の気象観測を題材とした小説である。『富士山頂』は富士山測候所に気象レーダーを建設するために活躍した人々を描いており、『芙蓉の人』は富士山測候所が設立に至ったきっかけとなった明治時代の夫婦による気象観測を描いている。

まずは、『富士山頂』から読むことを薦める。新田次郎は富士山測候所に勤務してから５年間にわたり通算400日を富士山頂で過ごしている。すなわち、富士山頂を自分の体をもってして体験しているのである。小説の中の細かな描写は、気象庁職員としての専門的な目で観察した結果であり、さらに小説家としての文章表現の結果でもある。その文章中の専門性の高さは、理系少年の心をとらえるばかりでなく、30年以上経った今でも知的好奇心を満足させることができる。

小説の中では、気象庁観測部測器課補佐官　葛木章一が主人公である。この人物、気象庁の職員であり、小説の印税で本俸よりも稼ぐ男であり、まさに新田次郎そのものであるところが面白い。有体に言えば、自伝だ。小説は葛木が大蔵省（現：財務省）で主計官相手に富士山レーダーの必要性について予算折衝するシーンから始まる。主計官が「それでは（富士山レーダーの）工事の具体的方法を５分間で説明してください」と問い、それに対して葛木は「できます。２分でやれというのなら２分でもできるでしょう」と答える。要するに、大型予算をつける

のに相応しいプロジェクトは、説明も単純明快にできるというのである。それまでの全国の観測網では台風の進路を判断するのに１時間かかっていた。台風の進み方によっては、すでに50km先に進んでいる。これでは進路予報とはいえない。富士山に気象レーダーを設置すれば瞬時に台風の位置と動きがわかるのである。レーダーは台風による人的被害を減らす、わが国の台風の砦となる。

中学生の時にこの部分を読み、大人になったら自分のやりたいことを一言で単純明快に人に説明できるようになろうと決意し、いままさにそれを実践している。確かに、大型予算を獲得したり、多くの人の協力を得たりするのに、説明は短ければ短いほどよい。短い一言を聞いて、それを聞いた人の頭の中にどれくらいの連想イメージが湧き出るか、そこがポイントだ。勝手にイメージを膨らませてくれるのであれば、説明は５文字でよい。

この『富士山頂』は昭和42年に発表されている。その後、この小説の解説を題材にした連載が会計検査院の定期誌「会計と監査」に連載された。この連載を残念ながら読んだことががないが、想像するに予算折衝の心構えと国民の血税の正しい使い方を勉強するための教材に使われたのではないだろうか。宇宙からの目である気象衛星が登場するまで、富士山レーダーは台風災害からわが国を守ったのだ。

さて、もう一冊の『芙蓉の人』について触れてみよう。芙蓉とは富士山の古語であり、明治28年に富士山頂にて冬季観測に挑んだ野中到の妻千代子をさす。新田次郎は富士山測候所に勤務するようになってから、野中到本人と親交を深めた。野中到は大学予備門を中退して、富士山観測所の設立を唱えだしたころ、「世界において富士山より高いところにある高層観測所は南米のエル・ミスチー山とフランスのモンブラン山の２山だけである。しかもいずれも夏期しか観測をしていない。もし富士山で冬期の気象観測に成功したら、それこそ世界記録を作ることであり、国威を発揚することである」と訴えている。

現代であれば、こう思っても「動かない政府は何をやっているのだ」と文句ばかり言っている人が多いだけであるが、野中到は自ら富士山に野中観測所を建設するのである。自分でよいと思ったのであれば、自分が動けばよいのである。私

は中学生のときにこのような姿勢にたいへん感動した記憶がある。野中到は、いよいよ富士山で観測を始める前に、日本気象協会の機関紙である気象集誌に「富士山頂気象観測所設立について」という寄稿をしている。

妻の千代子は、夫を見送った後、夫が一人で気象観測をしながら生活するのは無理だと感じ、後を追うように富士山に登る。実は夫に黙って気象学の勉強をして観測機器についての知識を得ていた。妻が役に立たないと思っていた野中到だが、日々を過ごすうち妻の実力に気がついていくのである。高山病で体調が思わしくない野中到の仕事を引き継ぎながら交代で富士山頂にて気象観測を続けたのであった。そして壮絶なクライマックスを迎える。

野中夫妻の挑戦があったからこそ、その後の富士山測候所の建設につながり、わが国の天気予報の精度向上につながった。わが大学のモットーであるVitality Originality ServicesのうちのServicesがこの挑戦にあたるのではないだろうか。高い能力を備えた人は、それを社会のために正当に行使する義務を負うのである。この小説を読んで、そこまで思う人が出てくれるとうれしい。

執筆者紹介

斎藤　秀俊

副学長、物質材料系教授。専門領域は、機能材料工学、水難救助学。

『書名』	著者名	翻訳者名	出版社または文庫・シリーズ名	出版年	税込価格
『富士山頂』	新田次郎著		文藝春秋（文春文庫）	1974年	490円
『芙蓉の人』	新田次郎著		文藝春秋（文春文庫）	1975年	520円

ブックガイド目次へ